

高齢者の自動車運転免許更新における認知機能検査でみられた軽度認知障害患者について

金井 光康¹⁾ 針谷 康夫¹⁾ 島崎 裕子¹⁾ 森田 詠子¹⁾ 八木 瑞貴¹⁾
美原 盤¹⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 認知症疾患医療センター

[目的] 75 歳以上の高齢者が自動車運転免許の更新ないし特定の交通違反をした際に、認知機能検査を受ける。記憶力・判断力が低下している第 1 分類の判定となったとき、臨時適性検査ないし主治医の診断書提出が必要である。診断書作成を依頼する受診者のなかに、認知症のみならず軽度認知障害 (MCI) もみられ、介入を要する。

[方法] 2020 年 1 月から 2021 年 12 月に当院を受診、MCI と診断した 31 例を対象とした。認知機能検査として、mini-mental state 試験 (MMSE)、frontal assessment battery (FAB) を全例に行い、trail making test (TMT) や Rey 複雑図形検査 (ROCFT) を一部の症例で追加した。脳画像は VSRAD を含む脳 MRI 検査、¹²³I-IMP SPECT 検査で評価した。SPECT は 3D-SSP 解析し、楔前部、後部帯状回、頭頂葉、後頭葉を関心領域とした。

[結果] 31 例の平均年齢は 79.0 ± 3.7 歳、22 例が男性で、8 例は単身世帯であった。3 例は運転免許を自主返納し、4 例が半年後の再評価で認知症へ進展し自主返納した。MMSE は 24.0 ± 2.8 点、FAB は 7.6 ± 2.2 点であった。海馬傍回の萎縮の程度は VSRAD で 1.6 ± 0.6 だった。脳 SPECT では 13 例が関心領域の血流が低下していた。アルツハイマー型認知症やレヴィー小体病の前駆段階が疑われる MCI 例は、TMT で注意や遂行機能を、ROCFT で空間認知機能や詳細な記憶力を評価し、患者へフィードバックした。

[結論] MCI から認知症への進展を予防するため、運動や睡眠等の生活習慣コントロールや社会的活動の維持などが推奨されている。警察が行う認知機能検査は、認知症の早期発見にも有用である。認知症で免許を返納する患者のみならず MCI の状態から、かかりつけ医と連携を取りつつアプローチすることが必要である。認知症高齢者では、自身の運転能力低下の自覚が乏しいことが多い。運転免許保持者にとっては、喪失後の生活における不安もある。公共交通サービスの充実や生活面における家族負担の軽減が早急に期待される。